

APNIC56 参加報告書

電気通信大学
先端工学基礎課程 3年
飯田 陸斗

1.はじめに

私は大学の授業や研究室などでネットワークなどに触れた経験はないが、インターネットの歴史や仕組み、標準化に興味を持ち始めた学生である。そのため、基礎的な知識はあるものの、実際の運用に関する知識は持ち合わせていない。そのため、このカンファレンスの参加をキャリアの出発点と考えた。

参加の経緯としては、コロナ禍が収束し、オフラインでのイベントが再開されつつあった今年の前半、長崎で開催されたJANOG52のJPNICブースで今回の支援プログラムを知る機会があった。当初は、事前交流会への参加の都合で、支援プログラムへの応募を断念しようとしていたが、連絡をとって見たところ寛大な支援をうけて参加ができるようになった。本参加報告書では、参加セッションと、その中でも特に印象に残ったセッション、今後の展望について述べる。

2.参加セッション

本カンファレンスでは以下のセッションに参加した。

1日目 9/12(火)

- ・Newcomers welcome
- ・Opening Ceremony and Keynotes
- ・30th Anniversary Lunch
- ・Technical 1
- ・Technical 2
- ・Welcome Social

2日目 9/13(水)

- ・Technical 4 - JANOG
- ・APNIC/FIRST/APCERT
- ・Lightning talks
- ・Meet the EC Cocktail

3日目 9/14(木)

- ・APNIC By-laws Reform
- ・Open Policy Meeting 1
- ・Open Policy Meeting 2

- ・APNIC Member Meeting 1
- ・Closing Social

3. 特に印象に残ったセッション

Opening Ceremony and Keynotes

本セッションでは、APNIC設立30周年を記念して、設立当時から携わる方々から祝辞をもらっていた。総務省総合通信基盤局から西方氏が登壇し、「政府は自由を尊重するが、実際には自由ではなく、法律が必要である。現在、インターネットには凶悪犯罪を含む悪質な行為があるため、政府にとっては不満であり、現状を受け入れることはできないため、政府とインターネットとの関係を解決するために一緒に問題を解決しなければならない。」と協力を呼びかけていた。エンドユーザーである私自身もインターネットの発展と付随する関連法の整備は遅れがちであると感じるところもあり、興味深い話だった。

基調講演では、村井教授がアジア太平洋がインターネットで果たす役割について自身の経験を踏まえて話し、続いて、金子氏が宇宙に繋がるインターネットの将来を講演した。月の通信インフラとしてのネットワークの講演部分は胸が踊った。月で使うネットワークでのIPアドレスやDNSなどどんな技術を使うのか、または新たに考えるのか、これから私自身もそれらの発展と同時に生きていけることには、興奮と期待に満ちた感情を抱かざるを得なかった。

Technical 2

本セッションの内容のStarlinkやshowNet、Goodbye TCPなどは、講演を聞く前から楽しみにしていた。最近では一部の携帯キャリアが通信衛星とスマートフォンを直接繋げ、山間部、離島といった場所を問わず通信サービスを提供することを発表するなどStarlinkはとてもホットな話題である。そのサービスの運用や課題などのなかで、Starlinkが提供できる特定地域の最大容量の質問があった。明確な答えはなかったものの、将来的に今の100倍程度の容量の増加を見込んでいるとの回答があり、驚いた。さらにGeoff Huston氏のGoodbye TCPの講演は、私の知らなかったQUICについて知る良い機会になった。最近標準化されたとのことなので、今後の動向を注視していきたい。

Open Policy Meeting

5つの提案が出されたが、その中でも prop148:IPアドレスのリース禁止については、議論が紛糾していた。国や地域などによりインターネットの普及が異なり、後進地域ではアドレスが必要であるもののように取得できないというような背景や、高額でアドレスが取引されていることを知った。この提案は、それぞれのステークホルダーの立場や意見が終始折り合わず、コンセンサスがとれないため差し戻しとなった。このようなコンセンサスが取れない場面を直に見れたことは大変良い経験となった。

4.カンファレンスの所感と今後の展望

APNIC56カンファレンスに参加し、数日間の貴重な経験を得た。まず、英語力の不足を痛感した。英語力不足の中でも、勇気を持って話しかけた方々は、拙い英語でも理解しようとしてくれ、それが励みとなった。言葉の壁を感じつつも、コミュニケーションができたことは非常に価値のある経験であったと断言できる。また、同年代の仲間たちと出会えたことも大きな収穫であった。共通の興味を持ち、議論を交わすことができ、新たな友人を作る機会となった。このつながりは今後も大切に育てていきたい。カンファレンスではポリシーの議論などから、それぞれのステークホルダーが存在することを実感した。インターネットの運用において、多くの関係者が協力し合っていることを実際に目にし、インターネットの複雑性と重要性について深く理解できた。

今回の参加経験から、英語力の向上に努力し、次回以降も国際的なカンファレンスに参加したいと考えている。また、ポリシーの議論やネットワークに関する知識を深め、将来的にはステークホルダーとして積極的に参加し、インターネットの発展に貢献していきたいと思う。このカンファレンスへの参加は、私にとって大きな成長と新たな展望をもたらしてくれたと言えるだろう。

5.おわりに

JPNICの支援を受け、夏休みにAPNICカンファレンスに参加し、多くのことを学んだ。支援の中でも、カンファレンスに先立って開催された事前説明会に参加したことが、現地の雰囲気や内容を事前に理解するのに役立った。この準備段階で得た情報は、カンファレンス自体に参加する際の自信を高め、不安を軽減するのに大いに役立った。カンファレンス中には、現地交流会という場で参加者と交流する機会があった。ここでは、フェローシップ参加者はもちろん、JPNICの方達との対話を楽しむことができた。様々なバックグラウンドを持つ方達との交流は、新しい視点を得られると共に、自分の視野を広げる上で非常に有益であった。また、カンファレンス会場でも、他の参加者が気にかけてくれる温かい雰囲気があった。初対面の人とでも気軽にコミュニケーションを取り、質問や意見交換がしやすかったことは、カンファレンス全体の学びと成長に寄与した。一番の収穫は、勇気をもってこのカンファレンスに参加したことが、私にとって全く新しい世界を広げてくれたことである。カンファレンスのセッションやディスカッションを通じて、世界中のネットワークワーキングコミュニティの重要性や多様性を深く理解した。また、異なる国や組織からの視点を収集し、今後の学習やキャリアに生かす方法について深く考えるきっかけにもなった。

総括すると、JPNICの支援に大変感謝しており、このカンファレンスへの参加が私の成長と将来への道を開く一歩となった。今回の経験を通じて、異なる文化との共感やコミュニケーションの重要性を痛感したため、これからも積極的に国際的なコミュニティに参加し、自身の知識を深めていきたい。

参加支援プログラムを企画、運営、協賛いただいた全ての皆様に感謝申し上げます。